



山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大学生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 主に検体の前処理作業を行う実験台前の橋詰さん。取り扱う検体は血漿試料であるため、測定の前に試料の前処理が必要。適切な前処理条件を決定し、処理したサンプルは分析装置で測定して結果を判断する。



2 機器分析室にてサンプルを各分析装置で測定。奥に見えるのはLC/MS/MSという分析装置。定量法の開発においては、前処理条件もふまえて最適な定量法のメソッド(薬物をきちんと定量できるか)を確立していく。



3 東和薬品で製造されている医薬品の数々。錠剤やカプセル剤、消費者にとっては服用のしやすさもポイント。ジェネリック医薬品ということで効能や安心感はそのままだけに、より求めやすい価格となっている。

たくさんの開発に携わりたいから、 医薬品のなかでもジェネリック医薬品に注目。

橋詰 栄敏 東和薬品株式会社製剤研究所BEセンター勤務

高校の化学の授業が楽しかったから、と理学部物質生命化学科への進学を決めた橋詰さん。当初は、一般・専門ともに必要単位数の計算が面倒という理由から手当たり次第に講義を履修。その結果、かなりの単位が取れて後半はとてラクだったといいます。研究室では有機光化学を専攻、大学院修了時には医薬品メーカーを中心に就職活動を行っていました。そして、東和薬品に出会い、そこでジェネリック医薬品というものを初めて知ったのです。それまで医薬品はすべて数十年にもわたる長い研究開発を経て市場に出回るものと考えていました。ところが、ジェネリック医薬品の場合は、すでに有効性や安全性が確認された新薬に準じて開発されるため、一品目に対す

る研究開発期間が比較的短くてすむわけです。その分より多くの種類の医薬品開発に携わることができる、という点に橋詰さんは魅力を感じたのだそうです。

現在橋詰さんが担当しているのは、開発中の医薬品が先発品と同等であるか評価する「生物学的同等性試験」という業務。主に生体試料を取り扱い、試料の前処理法や分析条件などを設定し、定量法を開発して血中薬物濃度の測定を行っています。大学で学んだことが直接生かされるというわけはありませんが、必要な情報の収集、文献などの読み方、実験計画の立案といった基本となる部分は現在の業務に非常に役立っているそうです。そして、この仕事に特に厳しく求められるのが効率よく業務を進め

るということ。すべての進行中の品目には期限が決められており、それを過ぎてしまうと申請に間に合わなくなり、市場に出るのが遅れてしまうという事態を引き起こしてしまうからです。担当品目が増えればなおさら時間的な余裕がなくなってしまいますが、そんな時ほど自分の中で整理しながらひとつひとつ効率よくこなしていくことを心がけているといいます。

そんな橋詰さんが大学時代を振り返るとき、学業に限らず大学で経験したすべてのことが決してムダになってはいないと感じるのだそうです。だから、後輩のみさんには、ぜひいろいろなところに首を突っ込んで経験値を高めてほしいというメッセージをいただきました。

探究の成果